新たな国民のたから

－文化庁購入文化財展－

New Treasures for the People

Exhibition of Cultural Properties Recently Purchased by the Agency for Cultural Affairs

◎桜螺鈿鞍（さくらでんくら）

平成27年9月19日（土）　～　10月18日（日）

長野市立博物館

Nagano City Museum

ごあいさつ

文化庁では、国宝・重要文化財の指定をはじめ、文化財の保存と活用に関する様々な施策を行っています。その中に「国民のたから」である貴重な文化財の散逸や海外流出を防ぐため、国が文化財を購入する事業があり、この事業により国の所有となった文化財は、国立博物館や各地の博物館等が開催する展覧会において公開されるほか、毎年各地の博物館と共催で「新たな国民のたから」展を実施しています。

このたび、長野市立博物館において「新たな国民のたから」展を開催し、近年国が購入し所蔵する文化財を中心に皆様に御覧いただくこととしました。

平成27年9月

文　化　庁
長野市立博物館

描かれた美

◎絹本墨画淡彩白衣観音図

一幅
能阿弥 (1397 ～ 1471) 筆
室町時代　応仁２年 (1468)
縦 77.7 ㎝　横 39.3 ㎝

能阿弥は、室町将軍家の同朋衆として連歌、古画鑑定、座敷飾り、画事など多方面に活躍した絵師で、能阿弥－芸阿弥－相阿弥と続くいわゆる阿弥派の祖。本図は72歳の能阿弥が息子のために泉涌寺妙厳院で描いた作品。能阿弥は、中国南宋末の画僧牧谿を学んで柔らかい水墨表現を得意としたが、本図はそれとは異なる謹厳な表現を示し、能阿弥の画域の多様さを示す例といえる。

紺紙金字大智度論巻第十一（神護寺経）

一巻
平安時代　12 世紀
縦 25.9cm　全長 1137.3cm

鳥羽天皇 (1103 ～ 56) の勅願で書写され、その後、後白河法皇 (1127 ～ 92) が京都・神護寺に寄進した一切経のうちの一巻で、平安時代の紺紙金字一切経の優品として知られる。表紙は藍で染めた紺紙に金銀泥にて宝相華唐草文の文様を表現し、見返には釈迦が説法する図を描く。料紙は紺紙を用い、銀泥にて罫線を引き、経文は金泥で書写する。軸は制作当初の撥の形をした金軸で、表紙と同じ文様が付けられている。このように当初の姿を今に伝えている貴重なものである。

◎紙本著色歓喜天霊験記（伝天神縁起）　巻下

二巻のうち一巻
鎌倉時代　13 世紀
縦 29.9 ㎝　長 699.6 ㎝

平安初期の天台僧円仁が中国から伝えた聖天法に基づき比叡山に歓喜天像を安置した造像縁起と、平安中期の尊意によって護持された歓喜天像が示した霊験を二巻に分けて描く。巻下には菅原道真の天拝山と石榴天神、清涼殿落雷、尊意参内など、尊意の法力で道真の怨霊を慰撫、鎮圧したことを描く。動的な群像人物描写は鎌倉時代の説話絵巻の特徴をよく示す。歓喜天の霊験を描く希有な中世絵巻として貴重である。

紙本淡彩雨江独釣図

一幅
室町時代　15 世紀
一休宗純 (1394 ～ 1481) 賛
縦 101.3 ㎝　横 33.7 ㎝

そぼ降る水辺に苫舟を浮かべ釣り糸を垂れる一人の人物。画面手前には淡彩で芦を、濃墨で切り立った岩を描き、背景の山は淡墨で、遠山は藍を用いて微かに表現する。激しい雨は山の端を隠し、重く煙った大気を表す。水上に一対の水禽が泳ぐ。上部には、描かれた表現世界を簡潔に詠み込む賛が一休宗純独特の書風で記される。

紙本著色酒飯論絵巻

一巻
室町時代　16 世紀
縦 30.7 ㎝　長 1416.0 ㎝

大酒飲みの糟屋長持、下戸で飯好きの飯室好飯、酒も飯もどちらも嗜む中原仲成の三人が、酒と飯の効用を論じ合う様子を描く。実際には酒と飯にこと寄せ、念仏宗、法華宗、天台宗を比較し、中庸の天台宗がもっとも優れていることを主張したもの。狩野派の様式を示す室町絵巻として貴重なもの。

紙本著色西行法師行状絵詞　巻三

4 幅
絵：俵屋宗達 (生卒不明) 筆　詞：烏丸光広 (1579 ～ 1638) 筆
江戸時代　寛永 7 年 (1630)
第一段　縦 32.8 ㎝　横 97.1 ㎝
第四段　縦 32.7 ㎝　横 48.9 ㎝
第六段　縦 32.9 ㎝　横 98.0 ㎝
第十四段　縦 33.1 ㎝　横 96.5 ㎝

かつて明応九年 (1500) に海田采女相保によって描かれた西行法師行状絵詞があり、それを烏丸光広が俵屋宗達に依頼して寛永七年に写させたもの。宗達による制作年の判明する作例として唯一のもの。本作は巻三の断簡で、第一段は秋萩の里を旅する西行、第四段は北白河で歌を詠む場面、第六段は在原業平ゆかりの交野の天の川を過ぎる場面、第十四段は猿沢の池に映る月を愛でる様を描く。

〈第一段〉

〈第十四段〉

◎絹本著色四季山水図

4幅
与謝蕪村 (1716 ～ 1784) 筆
江戸時代　明和 9 年 (1772)
縦 23.8 ㎝　横 (春・秋)40.0 ㎝　(夏・冬)37.1 ㎝

与謝蕪村は江戸時代中期に活躍した俳人で文人画家。本図は蕪村 57 歳の筆で、俳諧の弟子であった京都の寺村百池 (1748 ～ 1836) のもとに伝わった。微妙な諧調の淡彩を駆使し、四季山水とされるが各幅の季節表現は曖昧で、むしろ異なる筆法で四幅を描き分ける点が特徴的。絵に添えられる賛詩は唐宋詩からの抄出で、蕪村の漢詩学習の様をうかがうことができる。

〈春 幅〉

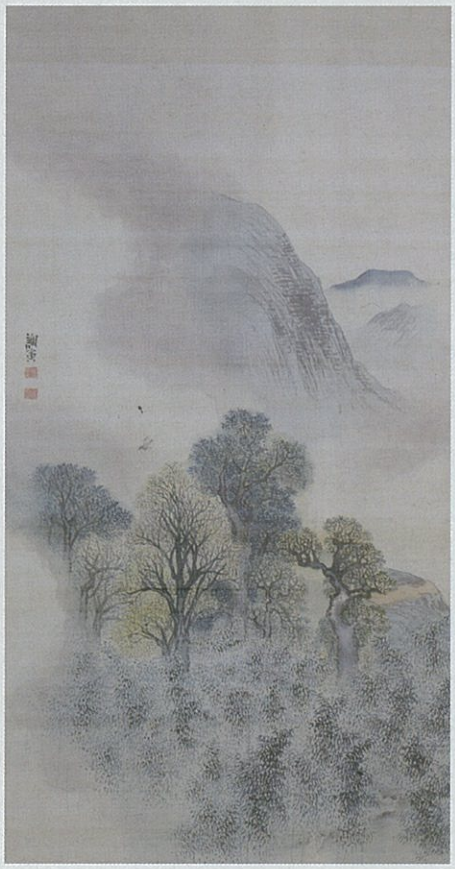
〈夏 幅〉

〈秋 幅〉

〈冬 幅〉

◎絹本著色新緑杜鵑図

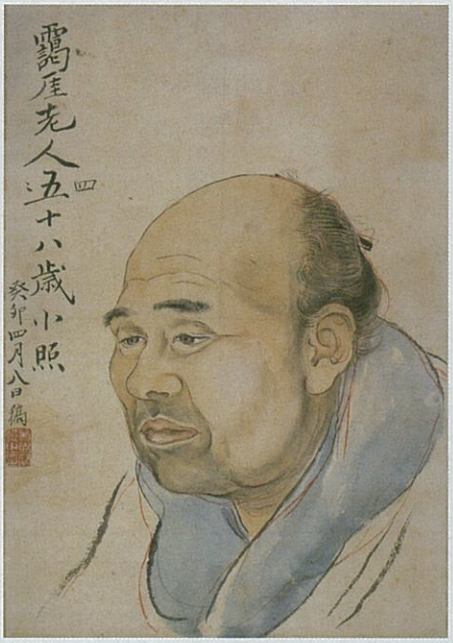
一幅
与謝蕪村 (1716 ～ 1784) 筆
江戸時代　18 世紀
縦 153.5 ㎝　横 79.4 ㎝



与謝蕪村は、池大雅とならんで、わが国の南画の大成者に数えられる絵師。本図は、柔らかく繊細な筆致と、緑、藍、黄色の淡彩描写で竹林を描き、空には一羽のホトトギスが飛び去る。明るい透明感ある画面の中に、あたかもホトトギスの声が聞こえるような一瞬の躍動を表現する作品。落款にみる「謝寅」は蕪村最晩年に用いたもので、本図も蕪村作品の到達点の一例と評価できる。

紙本著色高久靄厓像画稿

一幅
椿椿山 (1801 ～ 1854) 筆
江戸時代　天保 14 年 (1843)
縦 38.7 ㎝　横 27.3 ㎝



高久靄厓 (1796 ～ 1843) は、下野に生まれ、江戸で谷文晁に師事し、また京都でも南画を学び、再度江戸に戻って渡辺崋山や椿椿山らと交流をもった文人画家。椿山による靄厓の完成像は、腰から上を写す個人蔵の絹本が重要文化財に指定されている。本図は面相部を写した紙本画稿で、靄厓が没した日付が記される。その後に制作された靄厓像の最初の画稿として貴重な資料である。

◎銅造薬師如来坐像

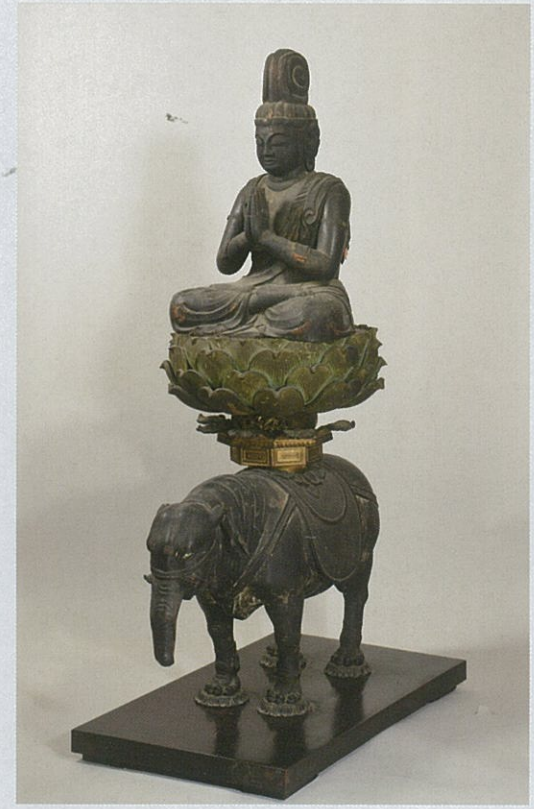
一軀
鎌倉時代　13 世紀
像高 14.1 ㎝

奈良興福寺に伝来した金銅仏で、図像的特徴から新薬師寺本尊薬師如来像（国宝、8 ～ 9 世紀）の縮小模像として造られたとみられる。端正な面貌や引締まった体軀、深く自然な流れをつくる衣文などに 13 世紀前半の南都仏師の作風が顕著に認められる。巧緻な鋳造技法は当代金銅仏中でも出色である。

◎木造普賢菩薩騎象像

一軀
平安時代　9 世紀
像高 56.4 ㎝

奈良圓證寺に伝来した普賢菩薩像。榧材の一木造。台座蓮肉まで共木で彫出し内刳りしない構造や厚みと張りのある体軀、深く鋭い衣文などの作風に平安初期風が顕著で、9 世紀末の製作とみられる。合掌する普賢菩薩の最古の遺品として注目される。象は生彩のある造形に鎌倉前期の特徴をみせ、動物彫刻としても見逃しがたい。



◎木造千手観音立像

一軀
平安時代　天禄元年 (970)
像高 111.5 ㎝

十八臂を具える菩薩像で、本来の尊名は准胝観音とみられる。奈良新薬師寺に伝来した。桜材の一木造。肥満した体軀や鎬を立てた衣文に平安初期風をとどめながら、表情は穏やかで彫り口も浅めとなり、全体にうかがえる温雅な趣に次代の特色を示す。台座蓮弁に天禄元年 (970) の墨書があり、製作年代を示すとみられる。

◎木造不動明王立像

一軀
平安時代　11 世紀
像高 93.6 ㎝

白山の開創者・泰澄ゆかりの古刹、越知山大谷寺に伝えられた不動明王像。越知山では古くより三所権現とともに地主神として不動明王が信仰されたという。台座を含めて本体のほぼ全容を一材から彫出し、頭体幹部を前後に割矧いでいる。洗練された優美な作風を示し、平安時代後期の不動明王像の典型として位置づけられる。

◎木造聖観音立像

一軀
平安時代　10 世紀
像高 113.4 ㎝

奈良伝香寺旧蔵の聖観音像。本体と共木で彫出される筒形の冠や、下ぶくれの輪郭で伏し目のおっとりとした顔つき、翻波式の名残をとどめながら浅く整えられた衣文線、太づくりだが穏やかな肉付けの体軀などに平安時代 10 世紀後半頃の特色を示している。表面仕上げも当初のものをとどめており貴重である。

◎絹本著色仏涅槃図

一幅
鎌倉時代　14 世紀
縦 225.5 ㎝　横 159.5 ㎝

沙羅双樹に囲まれた宝台上に入滅する釈迦が横たわり、その周囲にあまたの衆生や動物たちが悲嘆に暮れてたたずむ様子を描く。上空からは釈迦の母摩耶夫人も急ぎ駆け下りてくる。全体的な図様構成は中国宋元画を学んだと思われるが、釈迦の身体を皆金色に表すなど彩色法は日本の伝統的技法による。中世涅槃図の展開を考える上で注目すべき作例の一つ。

◎絹本著色孔雀明王像

一幅
平安時代　12 世紀
縦 81.2 ㎝　横 42.4cm

孔雀上の蓮華座に正面向きに坐す孔雀明王。一般に災厄除去や雨乞いなどを祈った。その姿は大きな月輪中に収まり、孔雀の尾羽根が光背のように広がって明王の座を荘厳する。不空訳『大孔雀明王画像壇場儀軌』を典拠とする。画面上部に種子を描き、菩薩形の装身具に独特の図様を示す珍しい作例で、おそらくは醍醐寺系の教学の反映と見なされる。繊細な面貌表現や清浄な色調を示す平安時代の遺例。

絹本著色智光曼荼羅図

一幅
鎌倉時代　13 世紀
縦 77.9 ㎝　横 38.8 ㎝

奈良・元興寺の智光という奈良時代の僧侶が感得したという図様形式の阿弥陀浄土図。中央に楼閣を背にして阿弥陀三尊が坐し、手前では菩薩衆が音曲を奏でる。宝池に架かる橋の上に智光と頼光の二人の僧侶が描かれる点に特徴がある。類似の現存作例が少ない中、本図は堅実な出来映えを示す一本。仏菩薩が皆金色で表され、細緻で丁寧な描写を見せる鎌倉時代にさかのぼる遺例。

武士の誉れ

◎桜螺鈿鞍

一背
鎌倉時代　13 世紀
前輪高 30.0 ㎝　後輪高 32.4 ㎝　居木長 40.5 ㎝

前後の両輪を樫材、居木に沢栗材を用いた大和鞍。前輪は山形がやや高く、州浜形を深く刳り込み、両肩に手形を刳る。総体黒漆地に螺鈿で、前輪、後輪ともに外面は満開の桜樹、内面に桜枝文を散らす。居木は表に桜枝文を配し、居木先に花弁を散らす。精美な桜の意匠をあしらった、鎌倉時代における螺鈿鞍の代表的な遺品である。

◎色々威腹巻　大袖付

一領
室町時代　16 世紀
胴高 27.2 ㎝　草摺高 26.2 ㎝　大袖高 40.2 ㎝

胴、大袖ともに紫・紅・白・紺などの種々の色糸を段変りに威した腹巻。各所に金銅装金具を配し、草所には、装飾と実用を兼ねて藻獅子文様や菖蒲文様の染草を用い、小桜形や菊花形の飾鋲を打っている。室町時代後期の典型的な腹巻の遺品である。日向国飫肥藩（現宮崎県）の藩主伊東家旧蔵である。

◉刀　金象嵌銘正宗本阿（花押）本多中務所持（名物中務正宗）

一口
鎌倉時代　14 世紀
刃長 67.0 ㎝　反 1.7 ㎝

鎬造で反りが浅く、身幅がやや広めの姿である。茎は大摺上げで、金象嵌による極め銘がある。湾調に小乱れを交えた刃文、板目のやや肌立った地鍛えの特徴などに相州伝の大成者として名高い正宗の作風が顕著である。本多平八郎忠勝（中務）から徳川家康、水戸徳川家、甲府綱豊を経て、徳川将軍家に伝来した。

◎太刀　銘備州長船住景光　元亨二年　月日

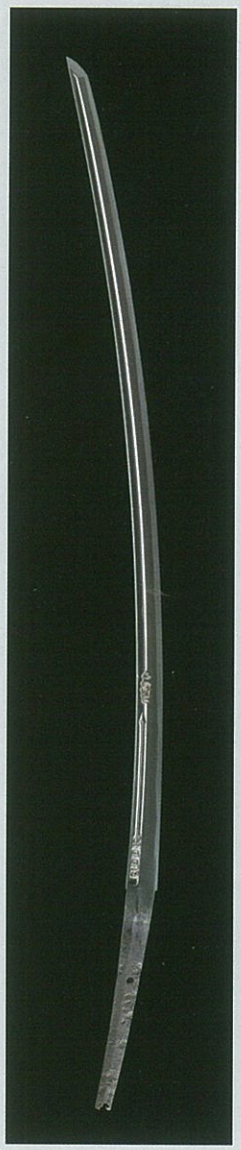
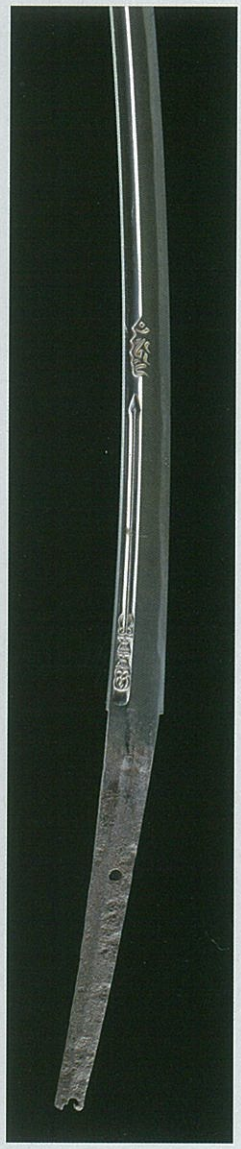
一口
鎌倉時代　元亨二年 (1322)
刃長 78.4 ㎝　反 3.7 ㎝

景光は、備前国（現岡山県）長船派の正系、長光の子。本作は、やや細身ながらも長寸で反りが高く、健全な太刀姿である。特に備前物の特色である乱れ映りが鮮やかで、直刃に乱れ刃を交え、匂口の締まった冴えた刃文は、景光の作風をよく示している。古刀の多くは後世に茎を切り詰め（磨り上げられ）ているが、本作は生ぶ（当初）の姿をよく留めた貴重な遺例である。

◎太刀　銘守次
革包太刀拵

一腰
南北朝時代　14 世紀
刃長 87.5 ㎝　反 3.6 ㎝

守次は平安時代以来、同名が数工いるが、本太刀は南北朝時代のもの。鎬造で腰反り高く踏張りのある太刀姿は、雄大豪壮な出来で、同工の特色がよく表れている。これに伴う革包太刀拵は、中世において流行した典型的な形式で、保存状態もよい貴重な遺品である。上杉景勝御手撰三十五腰の一つで、景勝ならびに謙信所用の伝来がある。

◎太刀　銘則重

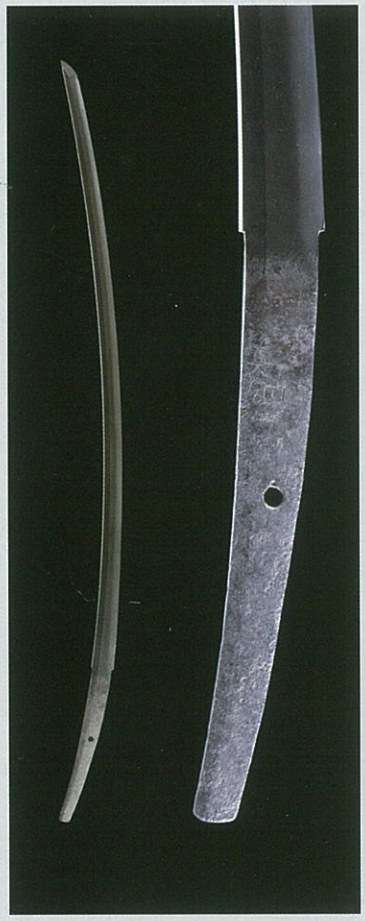
一口
鎌倉時代　14 世紀
刃長 71.5 ㎝　反り 2.46 ㎝

越中国（現富山県）則重は、相州鍛冶の祖である新藤五国光の弟子といわれ、同門の相州行光、正宗よりも鍛えが肌立ち、地景、地斑が強い個性的な作風を示す。正宗十哲に数えられる、相州伝を代表する刀工の一人。本太刀は、よく約んだ板目肌に変化に富んだ刃文を焼くなど、則重の高い技量、個性的な作風が遺憾なく発揮された代表作の一つである。

◎太刀　銘安綱

一口
平安時代　12 世紀
刃長 74.8 ㎝　反 3.1 ㎝

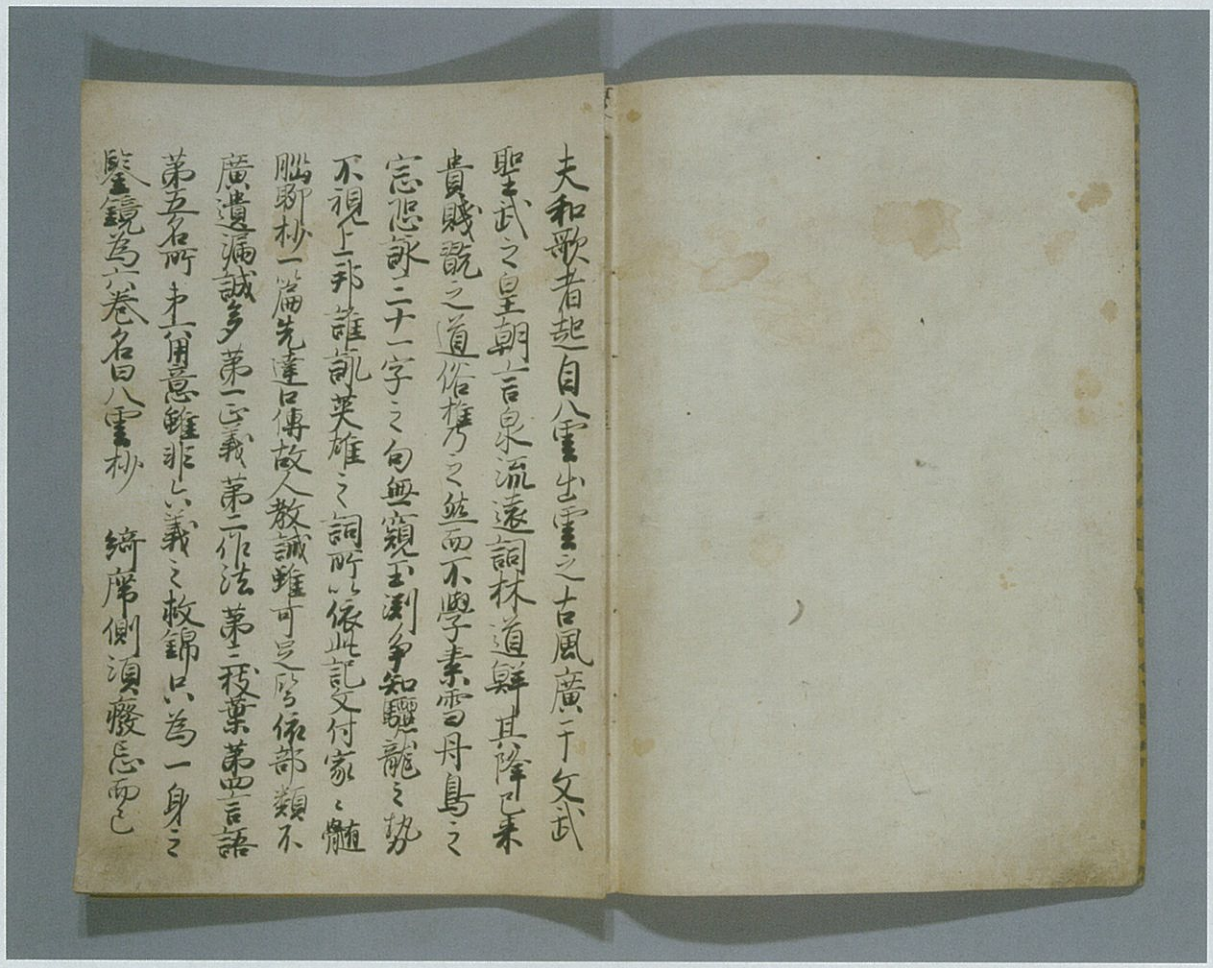
伯耆国（現鳥取県）で活躍した名工、安綱の典型作。細身で腰反りが高く小鋒の優雅な姿は、平安時代中・後期の日本刀の特徴をよく示している。鍛えは、平安末期の山城や備前のものに比べて肌が大文様で、肌立って黒味を帯びた地色を呈し、小乱れの刃文も後代のものに比してより不規則に乱れて古雅である。在銘作は少なく、貴重な一口である。



◎八雲御抄

六帖のうち
鎌倉時代　13 世紀
縦 25.1cm　横 16.7cm

『八雲御抄』は、順徳天皇 (1197 ～ 1242) が従来の歌学書を編集・集大成したもの。書名は「夫和歌者起自八雲出雲之古風」に始まる序文に「名曰八雲抄」と自ら記す。本書は承久の乱以後、佐渡に配流されてからも本文に加筆訂正を加え、藤原定家 (1162 ～ 1241) の許に送った本の系統で、伏見天皇が手づから写された宸翰本として古来より伝えられている。


夫和歌者起自八雲出雲之古風廣于文武
聖武之皇朝言泉流遠詞林道鮮其降已来
貴賤殊之道俗雖乃之並而不學素雪丹鳥之
忘恩詠二十一字之句無窺玉渕爭知驪龍之勢
不視上邦雄飛英雄之詞所以依此記文付家之髓
腦抄一篇先達口傳故人教誡雖可見部類不
廣遺漏誠多第一正義第二作法第三枝葉第四言語
第五名所未用意雖非小義之枚錦只為一身之
鑒鏡為六卷名曰八雲抄　綺席側須臾忽而已

唐物肩衝茶入（残月）

一口
南宋時代　12～13 世紀
高 8.2　口径 4.0　胴径 6.7　底径 3.9

茶入とは抹茶を入れる小壺をいう。中国産の唐物茶入は喫茶の風とともに鎌倉時代に日本に伝えられ、珍重された。この茶入は典型的な肩衝茶入の姿を示し、残月の銘は青白色の釉溜まりに由来する。かつて室町幕府の将軍足利義政が所持し、その後織田有楽、前田利家、徳川家康らに伝わった。各種の袋や牙蓋、盆などが添えられている。

◎灰被天目茶碗（虹）

一口
元時代　14 世紀
高 6.9　口径 12.2　高台径 4.4

灰被とは、二重に掛けられた艶の無い釉薬の調子があたかも灰を被っているように見えることによる呼び名である。その変化に富んだ作風により、室町時代末以降、侘びの茶風の深まりとともに評価を高めていった。虹の名は、左右に掛け分けられた斜めの釉境が窯変により銀色を呈し、虹を思わせる見事な景色を作り出していることに因む。室町時代には将軍足利義政が所持していた。

◎色絵若松図茶壺　仁清作

一口
江戸時代　17 世紀
高 26.3　口径 10.5　胴径 21.7　底径 9.6

仁清は丹波出身の陶工で名を清右衛門といい、洛西御室の仁和寺近くに窯を開いた。京焼の大成者として知られる。この茶壺は仁清黒とよばれる光沢のある黒釉が施されており、土肌の部分を土坡に見立てて、金で山並みを表し、赤、緑と金銀を用いて若松、椿などの図がリズミカルに配置されている。讃岐国丸亀藩主京極家に伝来した。

◎蘆屋浜松図真形釜

一口
鎌倉時代　14 世紀
通高 25.0 ㎝　高 19.3 ㎝　口径 13.6 ㎝　胴径 24.2 ㎝

ややふっくらとした伝統的な形、低い位置につけられた鬼面形の鐶付など古蘆屋真形釜の典型的な作風を示している。胴部には、松樹を配して細かな霰文で州浜を表し、さらに細かい線で青海波風の波文と波頭を浅く表して、浜松の意匠とする。茶の湯釜の中で最も古式に属する遺品の一つである。小堀遠州筆の「芦屋／末松山之釜」の箱書きを伴う。

鉄砲玉鋳型蒔絵棚

一基
江戸時代　17 世紀
高 35.6 ㎝　縦 27.0 ㎝　横 53.4 ㎝

総体を銀梨地として、鉄砲玉鋳型と鉄砲玉を金の薄肉高蒔絵で表した棚である。南蛮渡来の器物を意匠化した、いわゆる南蛮漆器は、桃山時代から江戸時代初期にかけて流行した異国趣味を反映したものである。鋳型の意匠の配置や表現に変化を加え、様々な工夫を凝らしている。棚の形式や意匠において独自な特徴を備えた調度品の遺例である。

野葡萄蒔絵棚

一基
桃山時代　17 世紀
高 65.6 ㎝　縦 32.5 ㎝　横 73.2 ㎝

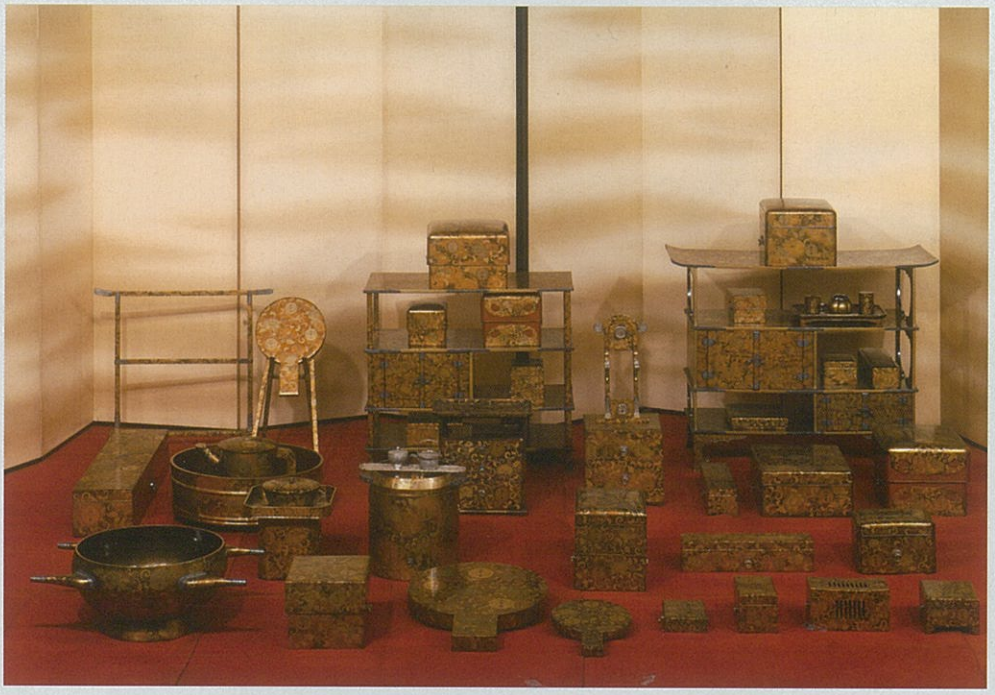
木製で、総体黒漆の厨子棚である。全面に野葡萄の図様を金平蒔絵で描き、葉脈などは描割に付書を加えて描き分ける。大胆で明快な図様表現や空間の配置などに、桃山時代の他例に見られる意匠感覚に通じるものがある。厨子としての形態、蒔絵技法、特異な図様表現などに時代的特徴が顕著に表れた優品である。

叢梨地牡丹唐草向鶴紋散蒔絵調度　36 種のうち

一具

江戸時代　18 世紀

厨子棚・黒棚を中心に化粧道具・手洗道具・文房具・香道具など、全体で 36 種が揃った豪華な大名婚礼調度である。いずれも木製黒漆で表面には金粉または銀粉を蒔いて叢梨地とし、金と青金の平蒔絵で牡丹唐草文を描き、金平蒔絵による向鶴紋を散らす。江戸時代中期の高度な蒔絵技法を駆使した優品で、ほぼ皆具として伝来する貴重な遺例である。



※お断り：この目録では官報に告示された指定名称等を用いています。
従って展示室での表記とは異なることがあります。
◉は国宝、◎は重要文化財を示します。

平成 27年 9月 19日
文化庁　発行

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan
〒100-8959　東京都千代田区霞が関 3-2-2
お問い合わせ　文化財部美術学芸課
電話　03-5253-4111
ホームページ　http://www.bunka.go.jp/

長野市立博物館
〒381-2212　長野市小島田町八幡原史跡公園内
お問い合わせ　長野市立博物館
電話　026-284-9011
ホームページ　http://www.city.nagano.nagano.jp/museum/